



総合地球環境学研究所

**地球研ステークホルダー・
プレゼンテーション大会**

地球環境問題を解決するイノベーション

報告書

2015年3月30日

はじめに

本報告書は、26年度に実施した人間文化研究機構機構長裁量経費「地球研TV事業」の一部として開催した「地球研ステークホルダー・プレゼンテーション大会：地球環境問題を解決するイノベーション」のまとめである。

地球研では「地球研フォーラム」や「地球研市民セミナー」など、一般むけのイベントをくり返し、その過程で参加者と登壇者が対話にちかいかたちでできるしくみを考えてきた。また、「超学際研究コーディネーター育成事業」やプロジェクト研究を通じて、合意形成のためのワークショップも開催してきた。地球研の「科学と社会の連携」は、「共創」を前提とする超学際研究の一側面である。これは、「共創のプロセス=co-design/co-production/co-delivery」に重きをおくため、従来の産官学連携よりも「共有価値の創造」の色彩が濃い。

フォーラムでのTwitterの導入やワークショップ開催には一定の効果があり、フロアからのコメントなども参加者に共有され、「双方向性」の議論が進むようになった。しかしながら、参加者あるいは参加主体となるステークホルダー（研究活動の利害関係者や環境問題の当事者）が研究者と対等な立場で議論をすることや「科学と社会の連携」のなかでの「双方向性」の担保は用意ではない。そこで、研究者がさまざまなステークホルダーに寄るだけでなく、ステークホルダーが積極的に研究者を受け入れる社会風土を創ってゆくことが「課題解決型研究」や「社会的インパクト」を实践するうえでの機能強化につながると考え、話題提供者を公募するかたちをとる大会を企画した。そのうえで、「人類が地球に生き残るための株式会社」リバースプロジェクトの全面的な協力を得て大会開催に至った。リバースプロジェクト代表の伊勢谷友介氏は俳優・映画監督としても社会に影響力の強い存在であり、リバースプロジェクトがさまざまな環境および社会課題への取り組みについて「社会のハブ」として機能しているためである。「社会のハブ」が多種多様なステークホルダーを引き寄せ、「地球研=研究者コミュニティのハブ」と連携することで超学際研究を促進する狙いもあった。

地球研ステークホルダー・プレゼンテーション大会は、研究者を含む地球環境問題のステークホルダーが、同じ立ち位置で意見を表明する機会をもち、社会の動向・要請をうかがいつつその後の意見形成を図るための第一歩である。また、地球研が「コンテスト」を主催することで、研究機関に対する世論の変化や、研究成果・環境情報に対する「社会の受容体」の形成を導くことを意図したものである。

2015年3月14日

総合プロデューサー
半藤逸樹

もくじ

はじめに	1
事業内容	
開催概要	3
開催プログラム.....	3
開催の趣旨	4
企画・運営メンバーの紹介	5
プレゼンテーションの記録.....	6
プレゼンター紹介	7
発表の要旨	8
総評	18
「評価員反省会」の記録	20
おわりに	29

事業内容

開催概要

地球研ステークホルダー・プレゼンテーション大会 地球環境問題を解決するイノベーション

テーマ 地球環境問題を解決するための「あなたのアイデア」

会期 2015年3月14日(土) 13:00~17:30

会場 総合地球環境学研究所 講演室

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4

主催 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

言語 日本語

聴講無料/定員80名

開催プログラム

13:00-13:05 開会の挨拶 安成哲三 (総合地球環境学研究所 所長)

13:00-13:20 趣旨説明 半藤逸樹 (総合地球環境学研究所 特任准教授)

13:20-14:00 基調講演 伊勢谷友介 (俳優・映画監督・リバープロジェクト代表)

14:00-15:00 プレゼンテーション第1部 5人 × 10分(7+3分)

〈15:00-15:30 休憩〉

14:00-15:00 プレゼンテーション第2部 5人 × 10分(7+3分)

16:30-16:40 投票 参加者全員で良いアイデアに投票

16:40-17:10 意見交換

17:10-17:25 総評 谷崎テトラ (一般社団法人ワールドシフトネットワーク代表理事)

17:25-17:30 閉会の言葉 阿部健一 (総合地球環境学研究所 教授)

開催の趣旨

半藤 逸樹 総合地球環境学研究所 特任准教授

総合地球環境学研究所(地球研)はこれまで、「地球環境問題の根源は、人間文化の問題にある」という哲学を掲げ、「人間と自然系の相互作用環」を解明し、「地球環境問題の解決に資する研究」をプロジェクト方式によって実施してきました。設立以来のさまざまな学問分野がつながる「学際性」に加え、ここ数年は学問分野のつながりだけでなく、「科学と社会の連携(つながり)」によって問題解決型研究をめざす「超学際性」も強くなっています。

「地球環境問題のステークホルダー(当事者、利害関係者)は、地球に暮らすすべてのわたしたちである」という認識のもと、地球環境問題について研究者・話題提供者が一般参加者とともに議論を組み立てる「共に創る」シリーズ(第12回 地球研フォーラム「“共に創る”地球環境研究」、第12回半 地球研フォーラム特別企画「地球環境研究を“共に創る”ワークショップ」、第13回 地球研フォーラム「地球環境をどうデザインするか?」など)を始めたのは2013年のことです。研究者では思いつかないアイデア、ステークホルダー間の問題認識のギャップ、そして合意形成の困難さが交差する時間を共有したことが、アプリ「環境観でつながる世界」(www.consilience-cyberspace.com)共同開発の糧になりました。研究者が過半数を占めるパネリスト陣の構成も再考し、試行錯誤をくり返してきました。社会的に影響力のある基調講演者・MC・評価員のキャスティングの背景にも、「未来可能性」を探求する「共に創る」シリーズの理念があります。

今回のプレゼンテーション大会は、さまざまなステークホルダーが、同じ立ち位置で意見を表明する機会です。地球環境問題の解決にむけ、わたしたちが人類の未来を切り拓くための価値と行動について、積極的な意見交換・合意形成を行なう場となればさいわいです。



企画・運営メンバーの紹介

総合プロデューサー



半藤逸樹

総合地球環境学研究所 特任准教授／アプリ「環境観でつながる世界」開発責任者

1974年生まれ。1996年東京水産大学水産学部卒、2000年に連合王国イースト・アングリア大学大学院環境科学研究科博士課程修了（2002年Ph.D.取得）。専門は地球システム科学。2001年にイースト・アングリア大学大学院環境科学研究科研究員、2004年に連合王国シェフィールド大学応用数学科研究員、2006年に総合地球環境学研究所研究部上級研究員、2007年に愛媛大学沿岸環境科学研究センター助教を経て、2011年から現職。現在は、数理モデリング手法を駆使して異分野の研究者と学際研究に取り組み、さまざまな地球環境問題のステークホルダー（当事者、利害関係者）と協働して超学際研究と「人間文化としての地球環境研究」を実践している。化学汚染の全球シミュレーションとリスク評価・不確実性解析を行なうかたわら、アプリ「環境観でつながる世界（Value-Action Net for Futurability）」を共同開発する。2013年に人間文化研究奨励賞を受賞。2014年9月からリバースプロジェクトの亀石太夏匡氏とともに「人類会議」を立ち上げる。2015年4月から、地球研未来設計FS（予備研究）「クラウド志向性環境リスク認識システムの開発と問題解決型環境観ネットワークの共創」の責任者を務める。

基調講演／評価員



伊勢谷友介

俳優・映画監督／リバースプロジェクト代表

1976年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。大学在学中の1998年、ニューヨーク大学映画コース（サマーセミスター）に短期留学、映画制作を学ぶ。1999年公開の映画『ワンダフルライフ』（是枝裕和監督）で俳優デビュー。2003年に初監督作品『カクト』が公開。2008年に地球環境や社会環境を見つめ直し、未来における生活を新たなビジネスモデルを創造するプロジェクト『リバースプロジェクト』をスタートさせる。2012年に「観客型民主主義から参加型民主主義へ」を掲げ、クラウドガバナメントラボを設立。主な出演作に『金髪の草原』（犬童一心監督）、『ブラインドネス』（フェルナンド・メイイレレス監督）、『CASSHERN』（紀里谷和明監督）、『嫌われ松子の一生』（中島哲也監督）、『十三人の刺客』（三池崇史監督）、『あしたのジョー』（曾利文彦監督）、『NHKドラマスペシャル・白洲次郎』（NHK）、『龍馬伝』（NHK）、『るろうに剣心 京都大火編／伝説の最期編』（大友啓史監督）、日韓合作映画『ザ・テノール 真実の物語』（キム・サンマン監督）、『ジョーカー・ゲーム』（入江悠監督）などがある。今後の公開作品、『新宿スワン』（園子温監督・2015年）、『天の茶助』（SABU監督・2015年）。また、2015年の大河ドラマ『花燃ゆ』に、主人公の兄・吉田松陰役で出演。



司会および主な評価員



亀石太夏匡

株式会社リバースプロジェクト代表取締役社長

1971年生まれ。1993年に渋谷にショップ「PIDE PIPER」を立ち上げ、その後、原宿、大阪にも展開し、ファッションシーンを牽引する。そのかたわらで、俳優としても活動し、映画『ソナチネ』などに出演。その後、映画製作に移り、脚本・プロデュースをメインに活動。主な作品として『カクト』（脚本・出演）、『ぼくのおばあちゃん』（脚本・プロデュース）、『セイジ〜陸の魚〜』（脚本・プロデュース）など。2009年に伊勢谷友介とともに「人類が地球に生き残るためにどうするべきか」を理念とした株式会社リバースプロジェクトを立ち上げ、代表取締役社長に就任する。衣食住を中心としたさまざまなプロジェクトを立ち上げる。



中島志佳

同志社大学経済学部3年生/第24代ミス奈良 2013年度ミス同志社グランプリ

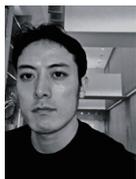
KBS京都テレビ「京都ふらり〜」、NHK奈良放送局「ならナビ」、海龍王寺PRイベントトークショー、阪急ウェディングフェスタなどに出演。関西ウォーカーに掲載。学生団体インベスターとミスキャンとのコラボによる福島県被災地訪問に参加。関西コレクションおよびキャンパスコレクションに出演。



谷崎テトラ

一般社団法人ワールドシフトネットワーク代表理事/放送作家/音楽プロデューサー

1964年静岡生まれ。環境・平和・社会貢献・フェアトレードなどをテーマにしたTV、ラジオ番組、出版を企画・構成するかたわら、新しい価値観（パラダイムシフト）や、持続可能な社会の転換（ワールドシフト）の発信者&キュレーターとして活動中。国連 地球サミット（RIO+20）など国際会議のNGO参加・運営・社会提言に関わるなど、持続可能な社会システムに関して深い知見をもつ。現在、伊勢谷友介とInter FM「KAI Presents EARTH RADIO」（毎月第4火曜21時〜）に出演中。愛知県立芸術大学非常勤講師。



仲津正朗

連続起業家/株式会社Coin Pass共同創業者兼CEO

1977年大阪生まれ。学生時代から、貨幣システムが文明社会と地球環境に与える影響について深い関心を持ち、2003年NY在住中にシルビオ・ゲゼルの自然的経済秩序の理論にふれ、起業家として、生涯をかけてポスト資本主義社会の貨幣システムの再発明を志す。2010年から12年は、シリコンバレーにて、3人の仲間とともに、コンテンツキュレーションのITベンチャーを創業する。帰国後、リターゲティング広告ソリューションの仏クリテオ社のグローバルRTBチームアジア統括ディレクターを経て、2014年から再び起業。現在、ビットコインの中核技術であるブロックチェーン技術を応用したゲゼルマネー・プラットフォームを開発中。



大西有子

総合地球環境学研究所 助教

国際連合食糧農業機関(FAO、イタリア)にて4年間、開発途上国への緊急食糧援助のためのデータ分析や情報発信を行なう。オックスフォード大学(イギリス)からクラレンドン奨学金を受賞したのを機に退職し同大学にて修士号、博士号を取得する。東京大学生産技術研究所、オックスフォード大学環境変化研究所勤務を経て、2011年から国立環境研究所にてIPCC第5次評価報告書の作成にたずさわる。2014年から現職。研究者とステークホルダーが連携して地球環境問題の解決をめざす国際研究プロジェクト、フューチャー・アースの研究推進活動に取り組んでいる。主な研究テーマは地球温暖化と生物多様性。特に、将来の生物の分布や、開花や紅葉の時期の変化を予測し、地球温暖化が動物や植物に与える影響を研究している。



タマル

シンガー&ソングライター

2006年に資生堂(マキアージュ)CM曲「My Brand New Eden(山田タマル名義)でメジャーデビュー。2010年3月、国連・世界水の日 記念イベント「World Water Day 2010 TOKYO Live」のイベントテーマ曲に自身のオリジナル曲「Planet Home」が起用され、同イベントにも出演。翌年の東日本大震災を受け、2011年には森林保護プロジェクト「タマルの森」を立ち上げ、イベントを開催。フォレストサポーターズの一員として、環境問題にも取り組んでいる。また、現在放送中の月桂冠(糖質ゼロ)CM曲(書き下ろし)、TBSラジオ『片岡鶴太郎 今宵も神の雫』テーマ曲ほか、NISSAY CM曲(歌唱)、BS-TBS『徳さんのお遍路さん——四国八十八ヶ所 心の旅』番組音楽、舞台の音楽監修を手がけるなど、テレビやラジオ、CM曲、映画など多方面に作品が起用。さらに、イベントの企画・プロデュースや司会、2014年には、ラジオのパーソナリティー(「東京発大船渡 TAMARU 歌の小包」)、女優としてドラマ(NHKドラマ10「聖女」)にも出演するなど、表現者として活躍の場を拡げている。

プレゼンテーションの記録



プレゼンター紹介

- 01 「エコグラム」写真からの意識改革
..... 水野ひまわり (高校生)
- 02 18歳の私が「今、出来ること」
..... 田村桃花 (高校生)
- 03 日本の中小企業の環境技術を表舞台に結集させよう！
～環境ビジネスの現場からの提言～
..... 藤井正徳 (経営コンサルタント)
- 04 わたしから
..... 宮本真由美 (会社員)
- 05 安全性能を環境性能に
..... 舟津宏昭 (団体職員)
- 06 労働時間の圧縮と社会の多様化
..... 浦野真理 (会社員)
- 07 現代文化による新たなコミュニケーションを創造
..... 日比野淳平 (自営業)
- 08 食料面からみた人類が地球に生き残る術
..... 金子隆耶 (学生)
- 09 未来可能性は子どもたちの感性の中に
——自然と人間の関係性を継承する教育
..... 飯塚宜子 (大学院生)
- 10 私たちが送るべきライフスタイルとは？
..... 山崎一平 (学生)





発表の要旨

01 「エコグラム」写真からの意識改革

水野ひまわり（高校生）



私は一枚の写真から、今の自分の目標となるほどに心を動かされた経験があります。それは、リバースプロジェクトのメンバーのみなさんが並んでいる1枚の写真です。その写真を見た瞬間、とても大きな衝撃を受けました。その会社について何も知らなかったのに、感覚的に「カッコいい！」と強く思いました。その思いをきっかけにさまざまなことを調べ、私の意識や考えは変化していきました。その写真との出会いが、自分のこれからの人生を大きく変えるものになったと言っても過言ではありません。

この経験から私は、人の意識を変えることができる写真の影響力を利用し、環境問題解決に何かできないかと考えました。そして、思いついたアイデアはエコグラム (eco-gram) というものです。これは、若者に人気のある画像共有アプリのInstagramにエコに関する専門ページをつくる



というものです。この専門ページをつくることにより、以下の変化が期待できます。

● 地球のために動く=カッコいいに変化させる

日本人の習性である人の真似、人と同じことをすると安心するという特徴は、外国に比べ個性がないように思われがちです。しかし、それを逆手に取り、eco-gramでエコな写真をシェアすることで若い世代が環境問題を考え、行動することが「カッコいい」という意識に変えられるのではないかと思います。

難しいことから始めても若者は「知ろうとしない」、「わかろうとしない」、「興味を持たない」と思います。そのため、私が経験した写真という視覚から入る影響力を利用し、わかりやすく、みんなの心にインパクトを残すことが若者に興味をもってもらう一歩となり、このように意識を変えることが地球環境をよくするきっかけになると思います。

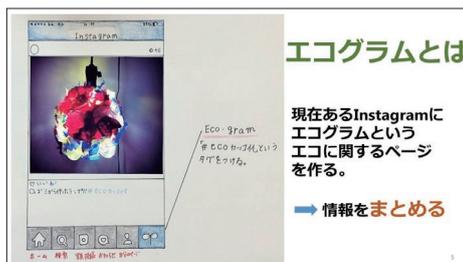
● eco-gram利用例

①「ゼロ円アート」というタイトルで、海の掃除をしてからサンドアートを作った写真やゴミから作ったランプの写真を投稿。

②「エアバックでできたリュック」をもっていろんな場所でJUMPした写真を撮り、「このリュックはエアバックでできてます」というメッセージとともに投稿。

→エコとartを組み合わせ写真に撮ることで、「カッコいいなあ」と思ってもらおう。

③オススメのeco商品の共有



エコをカッコいいものにするだけで若い世代のもつ「ダサイ」、「カッコ悪い」、「真面目」というイメージを取り払いたいと思います。そのため、写真をメインにした共有アプリであるInstagramを利用しました。以上が、私の考える提案です。





02 18歳の私が今、出来ること

田村桃花 (高校生)

地球環境問題とは...

- ・温暖化
- ・オゾン層の破壊
- ・森林伐採
- ・ごみ問題
- ・水質汚濁

日々、深刻化している・・・!

観光地でのポイ捨て

- ・飲み物、食べ歩き
の残骸が……!!!
- ・すぐ歩く先にごみ箱が
設置されているのに…

なぜ???

- ・ごみ箱の設置場所が
目立たない



・何度も同じ場所を訪れると
どこにごみ箱があるか覚える



・旅行で訪れる観光客…
どこにごみ箱があるか知らない

提案①

- ・カン、ペットボトル、
燃えるごみのごみ箱を
増やし50m間隔で設置



提案②

- ・観光地で配布される
周辺案内マップに
ごみ箱設置場所を記載



4R(ごみ処理の原則)

- ・REFUSE…やめる
余計なものは買わない
本当にそれが必要?

・REDUCE…減らす

- ごみの発生抑制
- エコバッグ持参する

・REUSE…再使用

- スーパーの回収箱に協力
不要な本を古本屋に売る

・RECYCLE…再利用

- 分別することで、
リサイクルしやすい

出来ることから…

- ・心掛けで大きく変わる
- ・循環型社会の形成へ
普段の生活から見直す

まとめ

- ・日々の深刻化を知る
- ・Actionを起こすために
私たちが呼び掛け・発信

日々、地球の環境問題が深刻化している。きっと誰もが、何かをしなければならぬと思いつつも行動に移せている人は、まだまだ少ないだろう。温暖化、オゾン層の破壊、森林伐採、ごみ問題、水質汚濁など、挙げればキリがないほど、山積している。18歳の私がこれから大学生、社会人となる過程で、これらの問題を聞き流すのではなく、自ら立ち上がり、解決に導くためにも「今、何を考え何をすべきなのか? 未来の地球の選択が目前に迫る「今」を大切にしていきたい。

私は18歳で高校生だが、まず身近でできること……。背伸びしないで自然に行動できることをいろいろ考えてみた。それは「いかにごみを減らすのか」ということだ。特に今回は観光地でのごみ問題に着目した。私自身、生まれも育ちも京都であり、子供の頃から、まだ自然の残る嵐山、太秦、大覚寺など京都の観光地を四季ごとに訪れるのが好きだった。それは今も変わらない。

しかし、ここ最近目に付くのは、悲しいことに観光地でのごみのポイ捨てである。カンやペットボトル、食べ歩き
の残骸。すぐ先にはごみ箱が設置されているのにもかかわ

らず、ポイ捨てがある。いつも不思議に思っていたが、よくよく考えてみるとごみ箱の設置場所が目立たないので、どこにあるかがわかりにくいかもしれない。私みたいに観光地巡りが好きで何度も同じ場所を訪れていると、だいたいどこにごみ箱があるかは覚えている。しかし、旅行で訪れる観光客はどこに何があるなど知る由もない。

そこで私からの提案として、カンやビン、ペットボトル、燃えるごみのごみ箱を増やして50m間隔で設置する。そして観光地で配布される周辺案内マップに、ごみ箱設置場所を記載する。この2点を挙げたい。そうすれば自然と分別も、リサイクルもできる。何よりもポイ捨てが、明らかに減る。「環境問題の解決策として何をすればよいのか?」と考えている人も、あるいは考えていない人も、分別することでその人自身も、いつの間にか協力しているのである。

冒頭でも述べたが、環境問題に対して自ら行動している人は残念ながら少ない。日々の深刻化、あるいは危機感を広く知り、Actionを起こすためにも、私たちのように気付いた人が、まず身近な家族から、友達から、呼びかけなければならぬ。勇気を出して。



03 日本の中小企業の環境技術を表舞台に結集させよう！ ～環境ビジネスの現場からの提言～

藤井正徳 (経営コンサルタント)

何故、企業の売上アップ・利益拡大の支援を生業とする私が、「地球環境」について提言をしようと思ったか……。そのきっかけとなった、あるクライアント企業がある。その企業は、河川湖沼の浄化や土壌改善を、圧倒的低コストで実現する「独自の微生物活性化の技術」をもっていた。ただ残念なことに、決して「商売上手」ではなく、その技術を利益につなげられない……。そんな状態が長く続いていた。

これは決して特殊な事例ではない。環境ビジネスは、その特性から一般的なビジネスには乗りにくく、商売としての成否は国や地方公共団体からの補助金・公共事業・法規制等に依存するケースが多い。しかし、これらは既存技術の利用推進にはつながっても、新技術開発・埋もれている技術の発掘や育成にはつながりにくい。

私はひとりの経営コンサルタントとして、同時にひとりの人間として、これを「もったいない」と考える。地球環境を救える画期的な技術が存在したとしても、それが商売として成立しなければ、企業はその活動を継続することができない。結果、その技術は世の中に出ることもなく、人類は自然と豊かに共生できる未来の可能性をひとつ失うことになる。

そこで、地球環境問題を解決するための私のアイデアとして、「中小企業の環境技術を表舞台に立たせるチャンスを提供すること」を提言する。具体的には、インターネット上に『環境技術の見本市サイト』を創設する。商売になるかどうかは別問題で、環境問題解決に役立つ可能性がある技術があれば、まずはとにかく気軽に登録してもらう。さらにイベント性を高めるために「環境技術コンテスト大会」や「展示会」「短期目標型プロジェクト」等の企画も行なう。

環境問題解決策を探している公共団体・企業にとっては、このサイトに来れば、有名無名問わずいろんな技術を一覧検索可能な利便性のメリットが得られる。登録企業にとっては、企業イメージ向上・技術開発力PR・社員の士気高揚等のメリットが得られるほか、あわよくば大きな商談につながるチャンスも得られる。

商売にならないという理由だけで埋もれてしまっている無数の技術の種……。この中に、地球環境を根本から救う核心的技術が埋まっている可能性は充分にある。これを発掘し世に送り出す取り組みは、日本経済の発展にも、地球全体の無限の可能性につながるものと考えている。





04 わたしから

宮本真由美 (会社員)

環境においても、平和においても、地球における問題は、1人の人間を大切にすることだと思います。ユネスコ憲章の前文には次の一節があります。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」。地球環境問題もまたしかりだと思います。

すべての鍵をにぎるのは「人の心」です。侵食されている砂浜を守れるか。美しい水をうむ山を守れるか。星空を見れる空気を守れるか。このようなことを、日常の中で考え、休日のカフェで語り合えるような人が1人でも多く増えることが大事だと思います。

この人の心を開拓するのは何か。これもまた人の心だと思います。よってわたしの今回のアイデアは、「語り合い」です。グローバル化、IT化が驚くべき速さで進んでいます。スピードが増す中で、新しいアイデアや策がこれからも創出されてくと思います。その中で、人と人が真剣に、また目を輝かせながら語り合うこの連鎖がすべての本質だと思います。

人間を無視した利己的で排他的な世界には、悲しくも現代における環境問題につながると感じます。矛盾しているかもしれませんが、システムや策、一過性も大事だと思います。さらに重要なのは永遠性です。永遠に、豊かな地球で有り続けること。貴地球研、貴リバースプロジェクトの皆様のようなプロフェッショナルな取り組みが必須である中、わたしのような平凡な1人の人間の行動もまた重要です。両者がともに、考え、悩み、ひらめき、実行し、修正する。この繰り返しのうちに地球環境の課題も解決していくことを確信しています。

先哲の言葉に

「未来は、今この瞬間に生きる人々の誓いの深さでできまるとあります。まずは、自分から、そして友人とともに、裸足で砂浜を歩き、風に吹かれる木々の葉の音を聞き、ビルの中から星空をながめ、希望をもってワクワクしながら語り合っていきます。



06 労働時間の圧縮と社会の多様化

浦野真理 (会社員)

大賞

あらゆる職業の労働時間を週20時間とする制度を提唱します。

人のライフスタイルと社会を大きく変えると考えられます。

例えば週5日で20時間働けば毎日4時間です。生活に占めるのは午前のみ。午後に何をしますか。朝から夕方まで働けば週3日が勤務日。残りの4日間に何をしたいですか。ひとつめの仕事のスキルを活用して別の仕事をしますか。まったく別の「やりたいこと」でしょうか。ボランティアでしょうか。何かを人に教えるでしょうか。学校に通いますか。

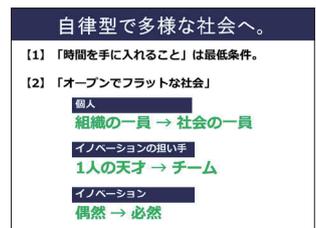
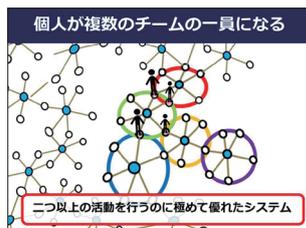
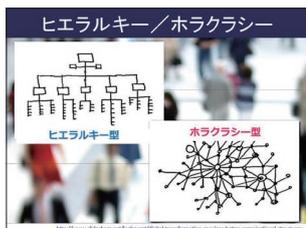
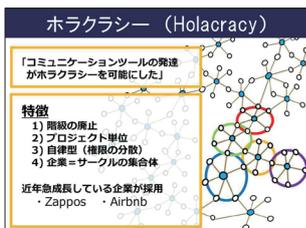
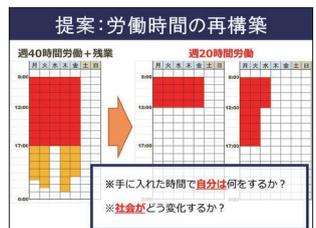
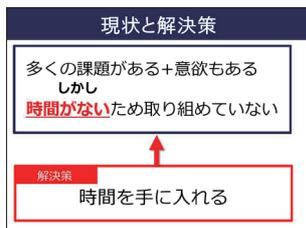
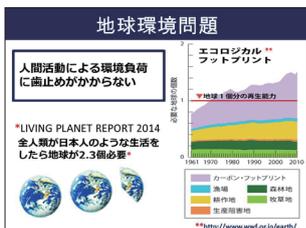
私自身は、NPO・NGOに参加したいと常々思っています。現状は両立不可能。諦めて一つの仕事をしています。僭越な事をいえば、「時間がない」という理由で私の意欲は埋もれています。従来のピラミッド型の組織体系をとらない企業が出てきました。アメーバのコロニーのような組織構造です。従来の「ヒエラルキー」に対して「ホラクラシー(holacracy)」と呼ばれます。海外ではZapposやAirbnb、日本ではZOZOTOWNを運営するスタートトゥデイやチームラボがこの組織体です。ITによる情報伝達の進歩がこれを可能にしたと考えられます。

ホラクラシーと私の提案の関連は次のように説明でき

ます。ヒエラルキー型組織はトランプで作ったピラミッドのようなもので、どこかが抜け落ちると全体が崩れやすく、個人は組織に縛られます。他方、ホラクラシー型組織は1点が抜けても全体が保たれるのみならず、ひとりが複数のプロジェクトを担当できます。より無駄がないこと、各メンバーが能力を発揮しやすいことは明らかです。集合知が活かされやすいという見方もできます。個人が時間とポジションから解放されます。実際、前述のスタートトゥデイでは6時間労働制を実施し組織が機能しています。

私の現在の仕事でもしばしば思うことがあります。半導体プロセスエンジニアの知見は、ソーラーパネルの技術課題に応用できます。専門性は似ていて、かなり近い技術分野なのです。2つの会社で同時に活躍することは現状不可能ですが、もしここに機会があればイノベーションが生まれるのは必然です。

社会が複雑になればなるほど、個人の役割は細分化され複雑になってゆきます。ひとりの人間が複数の役割を果たすことが効果的になります。ひとつの仕事を20時間とし、余った時間で別のことをする。個人の生き方がより自由になり、社会が多様化し複層化します。テクノロジーが、私の提案を可能にしていると思っています。





07 現代文化による新たなコミュニケーションを創造

日比野淳平 (自営業)

私はこの言葉を強く信じている。

「和を以て貴しとなす」

かつて聖徳太子が日本人の心を説いたように、日本は古来から人と人、人と自然との調和をはかり、独自の価値観、文化を育ててきた民族だといえる。

そのような文化の根底には、美しい四季、自然の恵みから「慈しみ」、「命の尊さ」を学び、また暮らしの中から、社会やひとりひとりの生活を豊かにするために、共存共栄、互助といった和の心、精神が育まれてきた。

また、今に残る伝統文化や風習は、先人たちが幾度の時代を越え辿ってきた足跡であり、そこには、この跡を辿る者への道標となる生きるためのヒントが詰まっているとを感じる。

今や私たちはその叡智に敬意を表し、自分を形成する価値観や文化を見直すことで、日本人としての尊厳、スピリットを取り戻し、自然との調和、生命と社会との繋がりを再構築する時期にきたのではないかと思う。

当プロジェクトは、温故知新、現代に活かすべき智慧や文化をもとに、地域社会における現代ならではの文化活動を通じてコミュニティを創造し、豊かな社会、生き方を育む環境づくりを行なうためとする。

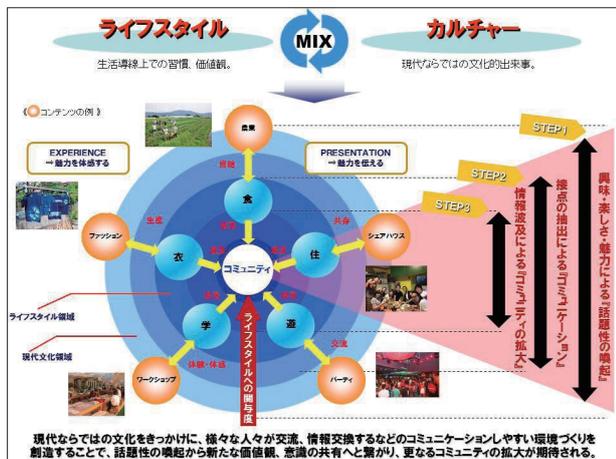
《具体例として》

一 ～交流・情報交換の場～

現代文化サロンの設立

一 ～自然と人をつなぐ生き方～

リトリートセンターの設立



宮崎県串間市の石波海岸から200メートルほど離れたところに、「幸島」(こうじま)と呼ばれる小さな島がある。

この島では1948年に京都大学の研究グループがニホンザルの観測を開始。52年にはサツマイモの餌付けに成功。翌53年には「イモ」と名付けられた当時1歳半のメス猿が、それまでの猿も行わなかった「砂のついたサツマイモを川の水で洗う」という画期的な行動を発明した。

この行動はやがて少しずつ群れの中へ伝わっていく。するとある日、幸島でサツマイモを洗うニホンザルが群界越 (例として「100匹」) を超えたとき、不可思議な出来事が突然起こった。それまで数年かけて少しずつ広まっていた手洗い行動が、この臨界値を超えた途端、まるでテレビ番組でも使ったかのように幸島の群れ全体に一瞬で広まったのである。

しかも驚くべきことに、この行動は幸島から200キロ以上も離れた大分県の高崎山の猿の群れや、そのほか日本全国にあった猿の群れにも広まっていた。(空間的にも物理的にも大きな隔りがあり、交流など全くなかったにもかかわらず)

Blog: <http://tenkaihai.xxxtopia.jp/> 引用

ある集団全体の中の何%かが同じ思考、同じ意識を持つことで、やがて全体が同調、共鳴し、現実を創りだす。



08 食料面からみた 人類が地球に生き残る術

金子隆耶 (学生)

準大賞

2050年には人類の数は90億人になると言われています。その為に、食料の生産量をもっと増やさなければいけないし、技術革新も求められています。同じように日本でも、今後起きると予測されるさまざまなリスクを考え、食料自給率の問題がよく取り上げられています。

しかし、本当にさらなる生産量を増やさなければいけないのでしょうか？ たしかに技術の革新もするにこしたことはないかもしれませんが、これ以上にエネルギーを使い地球環境をこわす必要があるのでしょうか？

そこで私が取り上げたい問題は食料廃棄、その中でも「規格外野菜」の問題です。日本の食料自給率は生産量ベースでいうと100%を超えるとも言われています。たしかに構造的な問題で消費しきれないという問題もあるでしょう。しかしながら、私が大学に入り農業に携わってきたこの3年で、大量の規格外野菜を廃棄している所を目にもしてきましたし、よくそのような話も聞きます。そして自分たちでも大量に廃棄したこともあります。理由は簡単で、①消

費者が好まない、②業者が引き取ってくれない、③箱にいれても不揃いのせいでコストに見合わないなど、たくさんの理由があります。

だからといって、それを安価で売ればいいというものでもないらしいです。それを売ることによってきれいな形の野菜が売れなくなってしまったり、市場の価格破壊をおこしてしまうからだと言います。普通に考えれば簡単に理解できてしまう事ばかりです。

でも、本当にそれでいいのでしょうか？ 短期的に物事を考え過ぎではないでしょうか？ 中長期的に考えるとほんとうにそれを食べないというライフスタイルを選ぶことがあっているのでしょうか？ 環境を破壊してまで技術革新をえらぶべきなのでしょうか？

私は違うと思います。もっとマクロ視点に立ち返り、人類が地球に生き残るためには今何をすべきなのかを考えるプレゼンをさせていただきます。





09 未来可能性は子どもたちの感性の中に ——自然と人間の関係性を継承する教育

聴講者賞

飯塚宜子 (大学院生)

自分の子どもに、あるいは次世代に、あなたが一番伝えたいことは何ですか？ 環境問題解決への真の近道は次世代への「教育」です。持続不可能社会をつくってきた大人だけで議論するのではなく、子どもという「新たな知性」のために、過去の再生産ではない適切な教育が何かを考え、実施していかなければなりません。

新たな社会経済システムのための価値観や哲学を考えるために、子どもたちが学ぶべきは、まず最も古く基本的な「人間と自然の関係性」でしょう。都市に生まれた子どもは、自分と自然は切り離されたものと考えがちです。どんな先端的科学技術、高度な情報化社会にあっても、私たちは、先祖からのいのちを引き継ぎ、他の生きものの命を食べることで自らと次世代との命を繋ぎ、死んでいく、という自然循環の一部です。そして多様な自然生態と寄り添う人間は、それぞれの土地に聖なるものや畏敬を見だし、生きる知恵や技術を生みだし、持続可能な暮らし方、文化を紡いできました。そして私たちは大気や水や土を通し繋がっています。例えば、38億年前に生まれた水の総量は当時と変わっていません。2億年前の恐竜が飲んだ同じ水を、今日の私たちも、100年後の私たちの子孫も飲むのです。

「知ることは感じることの半分も重要ではない」とレイチェル・カーソンは言いました。基本的な縦の繋がり（歴史性、通事性）と横の繋がり（多様性、共時性）を自らの「感性」で感じとり、そこから考えていく学びが必要です。感性が自分の内に育つなら、環境への思想、倫理観、感謝や畏敬などはおのずと備わっていくでしょう。テクノロジーや情報や制度も、人の健全な感性に基づいてこそ、持続可能性へのツールになるのです。

私たちは一つの試みとして、文化人類学者や地域研究者と協働し、北米先住民やモンゴル遊牧民、チベット族やバカ・ピグミー族の暮らしを、日本の教室の中で体験的に再現するワークショップを始めています。3年目の今年、京都府の受託事業として、200人を超える親子の参加を得ました。しかし、もっと多くの方の協働があれば、さらに面白い内容や手法を持つ場が生み出されると思います。

子どもたちに何を伝えたいのかを考えることは、実は、人間とは何か、土地とは何か、幸福とは何か——すなわち生き方について、大人が考える機会になるのです。考え、行動し、自らが継承の一部になっていくことが、地球環境問題解決への道なのです。

生まれながらの都市生活を営む
子どもたちが未来をつくる

俯瞰すれば・・・イノベーションのために
個人のライフスタイル + 新たな社会経済システム

新たな価値観や哲学 依って立つところはシンプル
① 人間と自然のつながり（人間は自然循環の一部）
② 感性

1つの試み

① 人間と自然のつながり（人間は自然循環の一部）
② 感性

先住民や遊牧民の暮らし方、
自然観、世界観
を感じとる場をつくってみよう！

旅世界を
京都で
しよう
2013

旅世界を
京都で
しよう
2016



写真提供：三井昌志

子どもたちに何を伝えたいか
考えること

人間とは何か、幸せとは何か
自分の生き方について
大人が考える機会

伝えることにより、新たな学び

地球環境問題を解決するイノベーション

子どもたちに、何を伝え、何を遺したいか
それぞれが考え、行動していくこと



10 私たちが送るべきライフスタイルとは？

山崎一平 (学生)

私は上智大学で経済学を専攻しており、主に発展途上国などの国々で、どうすれば豊かさと環境保護を両立できるかというテーマについて研究しています。

その中で「適正規模」という概念について触れる機会がありました。生物には適切な消費量・生産量があり、どの生物もその適正規模を守って生きているという理論です。

人間の適正規模を測る指数として「エコロジカルフットプリント」というものがあります。これは生態的な足跡を表し、人間の自然資源(食糧、植物資源、エネルギー資源)消費量と地球の生産能力をグラフ化したものです。

この指数によれば1987年ごろに地の資源生産量を超え、現在も増加傾向にあります。つまり1987年以降人類は、太陽エネルギーによって生成される生産物では足りず、過去に蓄積されてきた森林資源や銅鋳物資源を消費して暮らしているのです。

2000年の時点でのエコロジカルフットプリントは1.2程度です。これを地球が循環可能な1.0以内に収めることが大切なのです。

資源消費を0にすることはできません。それは、すべての生物がそうです。私たちはとにかく資源の消費を根底から否定しがちですが、それは現状では難しく、適正規模になったライフスタイルが求められています。

循環論について

私は上記の研究を通して、一つの結論に至りました。それは、「何を基準にエコか・エコでないかを定義するか」ということについてです。エコという言葉は世にありふれるようになりましたが、定義は広範に至り、煩雑になりがちです。

私はエコというものを、「人間の手(科学技術)によって分子構成を変えられていない状態での循環」と定義しました。自然界に天然に存在するもの—水や天然資源、動植物、生態系や食物連鎖システムも含む—は地球のための仕組みとして最も美しく、人間はそれを科学技術によって狂わせてきたといえます。

水素自動車などは、水素と酸素を反応させて水が生成されます。化合物、生成物ともに自然界に天然に存在しているため循環型であるといえます。NO_xなどの酸化物は田んぼなどで存在する場合がありますが、それは人間の農業などによって生み出された「本来の自然界」には存在しない物質であるため、循環型ではなく、改善の余地があります。

本定義を使えば、あらゆる事象、活動が循環型であるかどうか、本当にエコであるかどうかを明確に定義することが可能になります。私のプレゼンでは、この定義と適正規模に基づいた、私たちが送るべきライフスタイルについての提案を行ないます。

環境問題を考えるために

↓

人間がいない状況を想定
自然資源蓄積、食物連鎖、生物多様性

仮定:地球は自然な状態において
最も効率的に機能する(ムダがない)

この仮定に基づく、環境破壊とは?
⇒既存の循環フローへの干渉活動全般

既存循環フローへの干渉

- 生物の乱獲
- 化石燃料の使用(発電、輸送用、合成樹脂)
- 遺伝子組み換え
- クローン
- 放射性物質の利用
- 森林の伐採
- 触媒による化学反応(酵素など除く)
- etc.....

日本人は自然を愛しているか?
⇒行楽地だけが自然ではない。都市も含めた大きな意味での自然を考える時代。

適正規模という概念

- 既存循環フローへの干渉を0にすることは可能か? ⇒現時点で技術的に不可能。原始の生活に戻るしかない。それを人々は受け入れられない(合理的意思決定者)
- 生物はみな、相互に干渉しあっている。なぜ既存循環フローに干渉しないのか?
⇒適正規模を守っているから。
例) 草食動物は植物を食べすぎない
肉食動物は他の動物を食べすぎない
生物には適切な消費量、生産量があり、一定の規模を保って生きている—**最適規模**

環境問題の解決のために

- 既存循環フローへの干渉を現時点でゼロにはできない

↓

干渉的な技術と非干渉的あるいは循環的な技術との併用により、適正規模の範囲に収めていくことが大切。
時間まで考慮すれば、限りなくゼロに近づけていくことは可能。

ライフスタイルの提案

- 干渉型と非干渉型のミックス

生活の中にエコマーク・グリーンマーク・再生紙使用マークなどの商品を取り入れていく。

↓

企業努力により徐々に非干渉型商品は増える。比率を大きくしていき、ALL非干渉型を個人でも目指す。
⇒**循環型ライフスタイル**

循環型ライフスタイル

- 合成繊維ではなくオーガニック繊維
- 添加物の入っていない食品
- エコマーク、グリーンマークなどのついた商品
- マイバッグで買い物
- エネオフーム
- 自宅で太陽光発電、風力発電
- 水素自動車の選択
- 電気、食事は適度に節制
- ゴミの適切な分別
- 建物の断熱材の導入
- バス、電車など公共機関の利用、自転車の利用
- 環境面における市民ガバナンス(ノーカー住宅地など)
- etc.....

総評

谷崎テトラ 評価委員長



評価の観点とポイント

プレゼンテーションでは、「問題設定」が重要です。今回のテーマは、「地球環境問題を解決するイノベーション」と、一言で書いてありますが、いまはもう、地球にやさしいなにかをすればよいというような、かんたんな状態ではないのです。環境問題と経済、社会が複雑に絡んでいます。個別には、水問題や生物多様性の問題などさまざまなことがあって、22世紀まで人類が生き残れない可能性として、その要因は100以上あるといわれています。つまり環境問題は、そうした100以上の危機的な状況を、すべて解決するソリューションが必要なのです。

もう一つの評価のポイントは、地球環境問題をきちんと認識して話しているかどうかです。一つのアイデアですべてを解決することはありえないのですから、「私は、この問題の、ここの部分を、こういうアイデアで解決したい」という論理の道すじができていくかどうか大きなポイントです。

いまの時代は、インターネットで調べて、すでにあるソリューションを組み合わせてプレゼンすることは可能です。もう一つのポイントは、その問題意識がほんとうに「自分ごと」になっているかどうかです。みずからの経験などもふくめて、「自分ごと」としてやる気があるのか、このことも評価に入れました。

「問題設定」と「本気度」、そして、それが「ソリューション」につながっているかどうか。いちばんのポイントは「ソリューション」です。「自分にはこんな思いがある」、



「こんな活動をしてきた」ということがポイントではなく、「それを解決するために、このアイデアを、こういうかたちで具体化できます」というところまで考えているかどうか。そして、そのアイデアに独創性があるかどうか。これまでにまったくなかったユニークなアイデアというのは、さすがになかなか出てこないのですが、自分なりのアイデアを入れ込めたかどうか重要です。

プレゼンターそれぞれのバックボーンの違いも加味しました。ステークホルダーの立場で話しているかどうか重要です。そんなことをポイントにして、評価委員会はかなり熱い議論になりました。

じつは、当初は大賞、準大賞、聴講者賞の3賞の予定でしたが、かなりもめましたので、賞を一つ増やすことにしました。大賞と準大賞、聴講者賞に加えてもう一つ、地球研特別賞をもうけました。

講評

◆大賞 浦野真理さん

浦野さんのプレゼンは、全員一致で評価できました。まず、問題設定のしかたがとてもよかった。環境問題にはみんな関心があるけれど、それが実現しない理由は、「みんなの時間の使い方の悪さにある」という着目点。そして、解決のための具体的なソリューションまで提案されたことが評価されました。

ホラクラシーの話は、オリジナルのアイデアではないのですが、考え方はリバースプロジェクトの考え方とちかい。リーダーシップというものがない、ある種のフラットな世界であれば、時間の使い方を変えることができるというのは、すごく重要なアイデアだと思います。

「時間の使い方を考えることは現実的だろうか」という指摘はありましたが、時間をバウチャー制にするとか、タイム・ダラーのように地域通貨に時間という価値を取り入れるなど、時間の使い方に関するさまざまな



アイデアは、現実ですでにいくつかあります。そういうものとホラクラシーとを組み合わせることで現実的になるのではないかと、ぼくは思いました。

◆準大賞 金子隆耶さん

さまざまな環境問題があるけれども、そのなかでも「食」にフォーカスするという論理構成と、彼自身が農業体験にもとづいて感じた現場でのこと——消費者にも問題がある、地域にも問題があるという問題設定。そして、もちろん本気度。そういうところはとても評価できます。

しかし、ソリューションにまでは落とし込めてはいなかったということで、ずいぶん評価は分かれたのですが、プレゼンテーション全体がとてもよくできているということで選ばれました。

◆聴講者賞 飯塚宜子さん

「イノベーション」という意味では、けっして新しいものではないのですが、環境問題を解決するには「教育がたいせつだ」という主張です。じつはぼくは15年前に南米のアマゾンの先住民「ケロ族」の村を訪ねて、彼らの生き方にふれたことをきっかけに、環境番組をつくる仕事をはじめたんです。これがイノベーションといえるかどうかはわかりませんが、多くのみなさんの共感を得たというのは、そんなことなのではないかと思えます。

◆地球研 特別賞 水野ひまわりさん

地球研の課題として、環境問題や地球研の取り組みを若い世代にアピールしたいということがあります。若い世代で、こういうことを真剣に考えて取り組んでくれたことが高く評価されました。さきほどの評価のポイントに照らすと、「問題設定」をもうすこし強く発信していただきたいと思いました。「いかに地球環境問題を伝えるか」というソリューションとして、Instagramのようなものを使うという具体的なアイデアと結びついていることも評価されました。

総括 「諸君、狂い給へ」

各賞を決める議論のなかで、「10人のそれぞれのアイデアは結びつけられるのではないか」という意見も出ました。たとえば、ホラクラシーの動きをより拡げるために、水野ひまわりさんのアイデアを使うこともできる。あるいは、問題設定そのものを、動物や食糧の話にすることができるという話にもなりました。ソリューションをこの場で提案するのは、たしかにむずかしいのですが、ソリューションをつくるためのソリューション——こうした「場」をつくるためにはどうしたらよいかという話もできました。

きょうは、「エコロジカル・フットプリント」のことを引用された方がいましたが、環境問題を解決すること以上に、文明の転換が求められています。2050年までに転換できないと、たぶんこの舟は沈んでしまう。今回はソリューションというところまでいかなかったとしても、文明論にはいたったのではないのでしょうか。

プレゼンテーションを視聴者として聴くだけでなく、「自分ならどのように解決するだろうか」という視点で考えたり、「このアイデアをうちの会社のテクノロジーと結びつけられないか」と考えることもできます。

たとえば、ぼくはいま「R水素ネットワーク」に関わっていて、世界中の水素カルチャーを取材しています。山崎一平さんは、最後の最後で箇条書きにしまっていて、ソリューションにはまとまらなかったけど、そのなかに「水素自動車の選択」とありました。これは「水素テクノロジー」と結びつけられるのではないかと思います。

きょうのこうした試みは、「ホップ、ステップ、ジャンプ」の最初のホップの部分です。みなさんこれをきっかけに、「ステップ、ジャンプ」へと……。イノベーションのためには、やはりジャンプが必要です。

伊勢谷友介は、大河ドラマ「花燃ゆ」のなかで「諸君、狂い給へ」と言いました。イノベーションを起こすには、これまでの価値観を変えなければいけません。そのためにもぜひ、「諸君、狂い給へ」と。

先端の研究機関の役割と市民の力の可能性

日時 2015年3月15日

場所 総合地球環境学研究所 セミナー室3、4

出席 半藤逸樹 地球研 研究推進戦略センター 特任准教授
伊勢谷友介 リバースプロジェクト 代表
亀石太夏匡 株式会社リバースプロジェクト 社長
中島志佳 同志社大学経済学部3年生
谷崎テトラ 一般社団法人ワールドシフト・ネットワーク・ジャパン 代表理事
仲津正朗 株式会社Coin Pass CEO
タマル シンガー&ソングライター
村松 一 一般社団法人リバースプロジェクト 代表理事
皇甫さやか 地球研 事務補佐員
進行 大西有子 地球研 研究推進戦略センター 助教

半藤●「地球研ステークホルダー・プレゼンテーション大会」を昨日、3月14日に地球研講演室に10人の発表者を迎えて開催しました。ついては、プレゼンテーションでは評価員を務めていただいたみなさん、基調講演をしていただいた伊勢谷友介さんとともに、きのうのプレゼンテーションをふり返ります。大西有子さんが聞き手になって座談会の雰囲気で行います。

7分間で論旨をまとめるむずかしさは、新鮮さも運んできた

伊勢谷●発表に慣れている人たちではなかったことが、まず印象でしたね。持ち時間が7分というので、なにを話すべきかの取捨選択ができていなかった。

でも、こういう経験を初めてした人には、「こういう

仲間がいるんだ」ということに気づけたし、それが力になったようだから、その点ではやはり意義があった。

亀石●ぼくは基本的に彼らのよいところを拾おうと懸命になっていたので、すごくポジティブに終わった。ただ、全体をふり返ったときに、それぞれ問題提起はできたが、それにたいして、「じゃあ、こうしていこうよ」という道筋の設定が弱かったかな。ぼくらもプロジェクトをやってきた経験はあるが、やってみないとわからないこともある。だから最初はやはり、ああいう思いをもつところからしかはじまらないと思う。

いずれにしても、ステークホルダーといわれる異なる業界の人たちとの交流を目的にするのはすごく有意義だし、こんごは意味のあるものになれると思う。互いにすごくいい機会になるような気がしました。

運営のシステムの話では、「ユーストリームが見られなかった」という意見がぼくのツイッターやメールにいろいろきていた。やはりそういうしかけをしっかりとやれば、ツイッターの投稿なども、ずいぶん期待できたのではないかな。あそこでツイッターや一般の人たちからの質問があると話を膨らませることもできた。あの場にいなかった人たちからの「ちょっと引いた意見」とかがあると、もうすこしいい議論ができたかもしれない。

半藤●ユーストリームはこれまで何回か導入していて、今回のような事故はこれまで起こらなかった。テクニ



カルな原因ですが、中継できなかった理由は、まださっぱりわかっていない。

伊勢谷●中島志佳さんは、進行担当としてどうだったんですか。

中島●司会として反省する点はいっぱいあったんですけど、一人ひとりの発表を聞いていて見入ってしまっていました。というのも、こういうイベントに参加するはが初めてで、しかも一般人のさまざまな職業の方が自分の意見を7分間にまとめて発表するということがすごく新鮮でした。次回もやってほしいなと思いました。

大西●大学でプレゼンの機会というのは。

中島●ないですね。ゼミでの発表を各自がやるくらいです。あとは、先生から講義を聴くかたちが多くて、「参加型」の授業はほとんどないですね。

ソリューションを議論できるイベントに育ってくれば期待できる

仲津●こういうスタイルとか、仕上りのネットワークは「アリ」だな、そういう感想でした。というのは、ぼくは自分でベンチャーをしているので、投資家のピッチコンテストがけっこうあるんです。新経済連盟のピッチコンテストだと、数百社のベンチャーがエントリーして、事前にスクリーニングのプレゼン大会がある。本番はやはり7分くらいですよ。オーディエンスとして投資家もきているから、そのプレゼンのクオリティしだい資金調達ができるかどうか死活問題だったりする。だから、みんなガッツリやってくるわけです。ぼくもそういう一人ですけれど。

その世界はそういうものですが、きのうの人たちって、わりと一般的な人たちですね。いくなれば、彼らのなかから、むしろ発表者が出てきているというスタイル。さっき亀石さんがおっしゃったように、自分たちの考えをああやってまとめて話すというだけでもすごい。伊勢谷さんが立ち上げたリバースプロジェクトの「磁力」は働いているにしても、ああいう一般の人たちが集まってナレッジを共有するというのは、すごく値打ちがある。

「じゃあ、こんごどうレベルアップをはかるか」となると、たしかに問題もある。昨日のピッチを見ているとそうなんですけど、ネットを使えばだいたいわかる

世の中になっている。だから、こんごレベルアップできるとしたら、粗くてもいいからソリューションを磨く場に行けるかどうかではないかな。たとえば、「これは独創的で、明日からでも実現できる」とか、「これは何人が集まればできるのか」など、そういう領域でソリューションのディスカッションができるイベントに育てることができれば、彼らがもっとアクティブに動けるイベントに育つんじゃないかな。

伊勢谷●たしかにそうね。「結実するところほどこなんだろう」というポイントがないと、ぼくらは手をださないんですよ、たいがい。だから、結実させるならなかのかたちを用意する。ベンチャーだと、「こうなれば資金がつく」というモチベーションを考えると、クオリティを上げざるをえない。そうして「結果をつくっていく」ことで、クオリティがもっと上がる可能性もありますよね。だから、「資金をつけるかどうか」だけではなく、「このうちの一つは実行しますよ」ということになると、いわば「知行合一」のかたちをとると、彼らとしても真剣にソリューションを組み立てるのではないかなと思うね。いや、7分では無理か。

亀石●いや、そういうこと。だから、ブラッシュアップされていったときに、「これは地球研で研究しますよ」というような優秀なものがあると、もっとモチベーションというか目的が見えてくるから。

伊勢谷●シビアにもなる。

亀石●そう。しかも、それを年間とおしてやって、最終的には来年度の研究材料になるようなことがあると参加者も鍛えられる。こちら側としても、もっと真剣になれる。そういう意味での可能性、拡がりも見えるかなと思いました。

大西●「モチベーションを上げるしくみづくり」を、こちら側でもっと準備すれば、ということですね。



伊勢谷●「結実するんだから、きちんとしておかないといかん」という状態をつくっておく。

仲津●そういうカルチャーでもいい。間違いなく交流は深まるから。

伊勢谷●逆にいうと、だめだったらゼロにするくらいの方があってもよいかも。でも、いいものはクオリティを上げることもできる。「よかった!」というところまで落とせる。ぼくらは、これで終わりではなくて、次のプロジェクトへと昇華できる。地球研は、研究するところだから実行力はあまりない。だから、そういう成果をかたちあるものにレベルアップしなきゃいけない。

龜石●リバープロジェクトとの連携も見えてくると、関わりのステップ・アップも見えてくるかもしれない。

外部の組織や団体と連携して アイデアを発展させるしくみを構築したい

半藤●地球研も、研究所として「応募でひろい上げる」というしくみがないわけではないが、しょせん「研究者コミュニティ」の話。直接にファンドをつけるとか、プロジェクトとして認めるには勇気がいる。そういう構造上の問題があるからこそ、リバープロジェクトなどの組織や団体にそういう支援を期待したい。

龜石●フィルターというか、ハブになるというか……。

半藤●そう、そういうのがかたちとしては理想的。今回のプレゼンでも、「いいな」と思うアイデアにはわれわれからアプローチして、「いっしょにやりませんか」ということはできる。しかし、最初からそれを言ってしまうと、極端なことをいうと、「一定のクオリティに達

しないものはぜんぶ切る」という話になってしまう。音楽コンクールでいえば、「1位、該当なし」のかたちにするのはどうかと思いますからね。

伊勢谷●ポジティブに、次のこととして考えてよいかも。金子くんについてはリバープロジェクトで取り込んで、あのプランをブラッシュアップすることもできる。地球研特別賞の水野ひまわりさんの発表も具体化は可能ですね。

谷崎●大賞の浦野真理さんは、環境問題が解決しないのは「時間の使い方の悪さ」にあるとして、ホラクラシーなどの考え方で具体的なソリューションまで提案した点が評価委員全員に評価された。

伊勢谷●とにかく、この機会にリバープロジェクトと関わって、いつか金子くんがプロジェクトを立ち上げてかたちにしたということになれば素晴らしい。じっさい、彼は農業体験にもとづいて食にフォーカスして、消費者と地域の問題を指摘した。ソリューションまで落とし込めていないが、海外の例を出したもんだから「できなくはないな」、「日本なりのをつくれるのではないか」というリアリティもあった。今回のこのプロジェクトで、「リバープロジェクトの裁量で、金子くんのプロジェクトをかってに実行しました」というところまでやってみてもおもしろいかもしれない。

半藤●なるほど。それはたしかにおもしろい。

仲津●このイベントのサブコンテンツみたいな感じで——「現代の松下村塾」もそういう感じなのかもしれないが、「問題認識とそのソリューションのつくり方」みたいなもののケーススタディとかトレーニングプログラムとかがあるといい。学校がこういうことを教えないんだから。



半藤●間違いないですね。

仲津●「1+1=2」を教えるときに、ものすごく不確実性のある世界の「=」になにがはまるかわからないみたいな……。正解はなくて、オプションは数百個でも考えられるくらいたくさんある。それは、「独創性があるって実行力のある人が、けっきょく結果を生み出す」みたいな世界のトレーニングって、ぼくは学校教育で一回も経験したことがない。そういうのがカリキュラムとしてあると、イベントとポジティブ・スパイラルになると思う。

ここでなにかが生まれる感じを演出する

大西●タマルさん、いかがでしたか。

タマル●私は、そういう「志」のある方って、たぶん私たちが思っている以上にいると思うんですよ。「考えている人」、「意識をもっている人」はいると思いますが、ああいうように公の場で発表する、表現する、人に話すことで、もっとソリューションを追求できるようになると思う。自分の考えていることをほかの人たちも考えていて、早く行動に移せるようになって、すぐに実現できることだったりする。そういうことを考えるある人が自覚する、意識をもっと高めることがこの発表の意義なんだと思いました。

それにあの場は、「なにを、どう感じてもいいんだ」ということを肯定できる機会ですよ。環境のことだからこそ、自分の考えが突拍子もないなどする必要もなく、自由に発言できる機会です。それに、いろいろな人のプレゼンテーションを聴いて私はどう思うかを整理できるうえに、評価員は発表についての評価からも学べる。これにプラスして、それぞれ疑問に思ったこともあったはずだから、「これはどうなんですか」と尋ねる時間があったら、もっと凝縮されたプレゼンテーションになるのかなと思いました。

大西●参加者からの質疑の時間もあったほうがよいと。

タマル●そういう「空気づくり」というんですかね。プレゼンテーションの中身について、「エッ、これはどういうことですか」と。プレゼンテーションを「かたちとして」というよりも、どういうことをイメージしているのかをその場で共有できると、プロジェクトとしても早く実現するのかなと思いましたね。みんなが一つのビジョンを共有できれば、「ここでなにかが生まれてい



る感じ」を会議としても演出できるだろうし……。そういう発言をみんなができる「空気」をつくるのが、評価員もふくめてスタッフ側・運営側にできることの一つかなと思いました。

今回は問題が山積していたが、既存の環境運動とはレベルが違った

大西●7分間でまとめるのがむずかしい方は、一般の方に多かったようです。ですから、発表で欠けている部分を質問で引き出してあげられれば、みなさんのアイデアはもうすこしはっきりしたかもしれませんね。

タマル●こういうフォーマットでない人に見せられないだろうと考えて提案した解決法やソリューションもたぶんあったと思う。こういう場だからこそ、プロジェクトになる前だからこそ、もうすこし掘り下げることができることもあるはず。

半藤●「15分のプレゼンに25分の質問」というのは、研究発表の形態としてはよくあります。今回、やはり「短いな」と思うのは、一般の人がそれをやると対談をはじめてしまうからですね。

龜石●そうね、質疑応答じゃなくておしゃべりになる。

半藤●やはり質問する人にも主張がある。

谷崎●でもね、そこは方針をビシッと決めておけばよい。ぼく自身は、環境運動に関わって20年です。ここにいる人たちは、一般の人よりは意識が高く5年とか10年だとか、けっこう取り組んでいる。しかも、「地球にちょっといいことをして、自分は満足」というレベルではなく、ちゃんとプロダクトにするとか、プロジェクトをマネージする経験のある人がここに集まっているわけじゃないですか。そういうクオリティのわれわれがやっているところを目がけて、「ともに、つくっていける人」が集まるしくみにしたい。「地球のことが気になるから、なにかをはじめたい」という人も、もちろんいい。でも、そういうイベントは山ほどある。「アースデ

イ東京」もそうだし。

「しくみをつくるしくみ」、「ソリューションを生み出すソリューション」から考える

谷崎●ぼくは環境の番組をつくっている。一般の人たちにむけてしている。環境NGOなどいろいろなムーブメントづくりのお手伝いにも行くんだけど、かならずおなじような議論になる。「まず、サロンをつくりましょう」、「ウェブを使って……」、「とにかく関わりをつくることはいいよね」という類。

でも、それを20年つづけてきている。20年つづけて、たぶんこの10年、15年のあいだで本気でソリューションを考えてきた。そのソリューションというのは、社会のしくみ、意志決定のしくみ、それから仲津さんが言ったようにプレゼンテーションをするためのスキルなどまでふくめて「しくみをつくる」しくみ、「ソリューションを生み出す」ソリューションまで考えるということをしてきた。

そういう意味では、「あるていどのハードルを決めておく」こと、参加する前のガイダンスも必要です。今回だとたとえば、「イノベーションを募集しています」という言い方があるいっぽうで、「アイデアを募集しています」とか「思いを発表してください」という言い方になっていたりするバラつきがある。「なにかやりたい人を集めます」と、「ソリューションを提案する」とでは目的が違う。どちらかにしないといけない。

地球研という「プロの現場」と「アマの現場」をどう調和させるか

谷崎●7分という時間ですが、これは短くはない。「問題がこれで、解決策はここにもっていきたい」ということがあって、「そのためのソリューションがこれです」。これが明確であれば7分で話せるはずです。プレていたり、無駄なことをしゃべったり、自分の思いや活動をPRしたかったり、いろいろなものはいるから時間がなくなる。

だいたいテレビのニュースの特集枠って、CMからCMまでが7分です。7分あれば、骨子は伝わるようになってるんですよ。ぼく自身がニュースの特集番組をつくるときも、だいたい7分以内で問題の所在から解決か

ら現場の声まで、「自分はこの問題を取りあげる。そのためにこうしたい」という準備をしっかりとやる。それが必要だということなの。

ぼくはTED Talks (ネットの動画の無料配信プロジェクト)に出たことがあるけど、TED Talksはプレゼンターに徹底的に指導します。すべての登壇者に、スカイプで何度も何度も連絡して、「その言い方だったら、聞いている側には冗漫として伝わらない」ということまで指導する。そういうように、「プロの現場」と「アマの現場」とがある。今回の企画はアマチュアの現場にはなっているが、地球研は地球環境のある種の殿堂というか、いろいろなソリューションが集まるべき「プロの場所」です。

今回はファースト・ステップとして、「ソリューションをつくるとはどういうことか」をぼくら自身がトライ・アンド・エラーで学ぶ機会になっていると思う。次に、「ホップ、ステップ、ジャンプ」で、1年後、2年後、3年後、もっといえばこの10年以内にしっかりソリューションを立ち上げるところまで到達できればいい。そういう意味でいうと、最初の一步としてはすばらしかった。だけど、おなじことを二度三度くり返すのではなくて、次はもっと上にいきましょうということを、ぜひぼくは言いたい。

明確なコンセプトのもとで、ロードマップを用意すべきだろう

村松●おおよそ谷崎さんのおっしゃるとおりだと思いますが、最初の2人、3人のプレゼンを聞いているときに、なんか違和感があった。一つは、あの会場の大きさと内容とがちょっと不釣りあいだった。いわゆる少人数で、あの人数ならば志がおなじような人たちが最初に顔合わせしておいてもよかった。十人十色で集まって、「がんばりましょう」という会をするにははコが小さいというか狭かった。聞いている側と話す側ともちかくて、この距離感は何にか違うなと思った。

谷崎さんがおっしゃったホップ、ステップ、ジャンプじゃないが、地球研という研究機関で可能かどうかかわからないが、ロードマップのようなものを用意して、「今回はどういう位置づけか」を明確にしておく。その段階で、途中で亀石さんが話していたように「実現化するタイミング」をどうつくるかなども、発表する側も、聞く

側も、モニターのむこうで見ている人もわかるようにしてあげたほうがいいと思った。

今回の登壇者については、わざと十人十色的にしたのかもしれないが、「よい、スタート」にしたにしても、もうすこし高いレベルでやっている人たちを集めることもできたのではないか。地球研というアカデミックな施設ですから、机上の空論に終わらない内容で議論しなくてはいけない。半藤さんたちが、ステークホルダーと関わってほしいというコンセプトをおっしゃっていたが、孤高の天才ではないが、最先端を走る勢いを見つけたほうが、地球研のブランドを考えればよいのではないかとぼくは思いました。

7分の時間に関しては、ぼくも充分だと思う。プレゼンのスキルは、みなさん感じたとおり、「自分がいかにむずかしい問題に取り組んでいるか」の苦労話、周りの人に「自分はこれだけたいへんなことに取り組んでいるんですよ」ということにほとんどの時間を使って、自分がなにをやりたいかを話している人はほとんどいなかった。これはただのスキルの話ですが、それでもTED Talkのようなプロセスを踏んだほうが、外側にむけて発信するときにはよいと思う。そのへんのトライ・アンド・エラーはこれからでしょう。

伊勢谷●ハイの提案はほしいが、ローの人たちも関わられる状態をどうつくるかも課題。だから、孤高の人が「すばらしい」と思ったときに、「それ、いっしょにやろう」となれる会を重ねるなど、だんだんメンバーが増えるしくみもある。「やれる人」というのはほんの一部で、一部の孤高の人たちだけがやるものとなるよりも、その人たち以外の人も関わられる、そういう仲間を集められるプレゼンテーション大会も考えられる。

動物を軽く話した舟津宏昭さんは、「それを求めています」的なところもちよつとあった。そういった人たちをつなげられるような目標をもつことも方法。

環境運動家が活躍する時代は終わった。

マルチ・ステークホルダー・プロセスの視点を取り入れてはどうか

半藤●さきほどの村松さんのことばがすごく響くのですが、ほんの数年前までは、われわれは市民との共同的なことをほとんど考えなかった。少なくとも、地球研では参与観察が主流でした。ひたすら自分の研究成

果を出していくスタイルです。そういうなかで、なんとかうまく市民の意見を拾っていけないかと。「ステークホルダーとどう関わるか」という試行錯誤のプロセスなのです。超学際「研究」である以上、社会実装や社会課題の解決につながる成果だけでなく、(どのようなステークホルダーと連携しても)学術的革新を起こさなければ意味がないのです。今回はアマチュアばかりが集まった。しかし、いっぽうでは、プロはこういうところには出てこないだろうと想定していた。

谷崎●もしそれが意図だとすると、「マルチ・ステークホルダー・プロセス(MSP)」の流れに則ってしっかりやるべきで、マルチ・ステークホルダーのプロセスを最初には始めるには、まずポジションをはっきりさせることがたいせつ。「マルチであります」と。「私は環境問題に興味がある金融の人間です。金融の立場からお話をします」という人がいて、「私はアーティストです。アーティストの立場でお話しします」というように、ポジションがしっかりしていること。ポヤーツと地球環境問題の話をはじめてしまうと、「この人、どういう立場でしゃべっているんだ」と、混乱することになる。

次に、ステークホルダーを分けて、ステークホルダーのプロフェッショナルどうしを結びつけるしくみをつくる。たとえば、金融もいれば、アーティストもいてということであれば総論は話せる。だけど、たとえば3人の金融のプロがいて、その3人がこっちにきて環境経済をつくる金融メカニズムをつくろうとガチで話しはじめたら、われわれが関わるよりも、彼ら3人でやったほうがよい。こっちにはアーティストが3人いる。では、そのアーティストによってどういう表現ができるか。メディアのプロがいれば、それをどうPRするのか。それを分科会で議論する。そのプロセスをつくるのが、マルチ・ステークホルダー・プロセスです。環境運動を環境運動家がやっている時代はもう終わった。ビジネスセクターもやらないといけない。そのことを明確に打ち出すべきだと思う。

だから、ビジネスのためのプレゼンテーション、そのためのアーティストを集めることも時間を分けてやってもよい。だから、「アートの立場でのプレゼンテーション」とか、「高校生の立場でのプレゼンテーション」というのもある。国連でのマルチ・ステークホルダー・プロセスだと、20代だけが集まるミーティングもある。そのように年代で設定することも、女性という性別で設定

することもある。ゴッチャにやるのではなく切り分ける。そして結びつけることをシステムティックに行なうことが重要。

よその世界の人間を取り込むことで 新たなパワーと実現能力とを得る

伊勢谷●「欲しい仲間を仲間にできる、会心の一撃が出る地球研」という設定ができれば、たくさんの人にウケますよね。

半藤●ドラゴンクエストですね。(笑)

伊勢谷●「実行者」が生まれるっていう感覚が新しくないですか。こういう研究所が、具体的にはじめてそのプロセスまでみてあげる。しかも、それを研究して、「こういう成果でした」というかたちで出せれば一歩進んだ感じがしますね。

半藤●感覚的には、その方向には動いている。

仲津●シリコンバレーでやっていたことですが、それこそ PayPal とかファンディングチームがいた施設にばくもいたんですが、水のNPOがはいっていて、「なぜここに事務所を構えているの」って聞いたら、「ここには実行者がいて、エグゼク्यूターが山ほど集まっている。こいつらと組んでいると水の問題の新しい切り口、解決策が出てくるかもしれないからだ」と。その彼は Ph.D. の研究者ですが、アカデミックな連中が実行の場に積極的に出ていく。文化人までも、そういう場面でガリガリやっている。

半藤●われわれは学問分野が連携する学際研究を、社会と連携をしていっしょに社会実装をめざしましょうと。これを「超学際」と言っているのですが、それをいま試行錯誤している状況です。たとえばNPOをつくらうかといったときに、日本のアカデミックな業界では、NPOを学者関係で固めてしまう。それを壊そう、なんとかほかとのアクセスをつくらうとしているのが現状です。これはそうとう本気にならないとダメですね。しかし、この感覚が地球研にはなかなか伝わらない。今回は、それを喚起しようという目的もあった。

この企画に関わっている人たちにはそれが伝わって、「なにかやろう」とか「気がついたら動いていました」という感じになるのですが、それが多くの研究者コミュニティには伝わらない。

伊勢谷●たぶん今回はリバースプロジェクトが関われ

るのは、「あなた、やる気があるの」とけしかけて、「じゃあ、やるよ」という状況をつくってあげること。そうなれば、プレゼンターも「やるんだ」って、もうすこしクオリティが上がると思う。

先端の情報を最初に提示して 市民に解決策を問いかける手もある

谷崎●地球研へのリクエストですが、地球研は研究者・学者の団体ですが、それ以外に環境保護運動をやっている要素もあるようにみえます。しかし、環境保護運動の集まりというのは、環境保護に興味のある「素人」の集まりです。そうして集まってなにをするか。たいてい環境運動がイケていないのは、「とにかく集まって、環境のことを語ればなんとかなる」と思っているところ。よくよく聞くと、環境に関してのリアルな知識のない人が多い。

「地球の危機はなにか」を地球研の学者の方はみなさん知っている。なのになぜ、あいかわらず最初に温暖化のことを言わなきゃいけないのか。やっぱり、みんな知らないんですよ、「知らないんじゃないの」と言う人はやっぱりいる。いま地球の危機が、たとえば水ではこういうことがある、大気はこうである、生物多様性はこうであるということを、ここでの成果をまず出す必要がある。

伊勢谷●「これに乗っかってこいよ」みたいな。

谷崎●そう、「こういう危機があるんだけど、みなさんどうしますか」っていう問いかけ。その問いかけがないまま、「私が思うにはゴミ問題だと思います」という女の子がきている。だけど、「ゴミ問題とはなにか」も正確なデータも彼女はもっていない。そもそも違っているところからスタートしているから、ソリューションにならないのね。

「ゴミ箱をつくればつくるほど、ゴミが増える」という統計が出ているわけ。だから、ゴミ箱がないところをつくることで、ゴミを持ち帰る文化をつくることに成功しているのが北欧。たとえばそういうデータ、学者がもっているデータをまず提案して、そのソリューションを考える二部構成にするのも方法です。

伊勢谷●でも、地球研にはこういう手ははじめにできるデータがあると、やっぱりおもしろいと思うね。「とっかかれるところがあるよ」と。

谷崎●「こんな危機があるんですよ。でも、解決方法がないんです。みなさんの知恵を借りたい」と。アーティストの知恵、建築家の知恵、ビジネスマンの知恵、そういうものに訴えかけるしくみにすると、地球研らしいのかな。仲津●なるほど。だから、「テーマ設定」ですね。谷崎●そう、けっきょくは「テーマ設定」と「ポジション」ですよ。

仲津●独自性を打ち出していますね。いい知恵はクラウドファンディングにつなげる。クラウドファンディングは、さまざまな知恵やアイデアを製品化する資金のスポンサーを集めるしくみです。出資者はけっこう本気ですからね。

「意識のある人」に情報をたくさん届けて 市民と地球研を力強くつなげは変わる

大西●皇甫さんはどうですか。

皇甫●私は地球研の人間として思ったのですが、今回のプレゼンは研究者の方がすでに手がけている内容が多かったですね。たとえば、「カフェをやろう」というお話はすでに地球研の研究者といっしょにやっている人がいます。古民家を借りあげて、そこに住んで、近所の人などと地域のコミュニティをつくっていらっやいます。こういうプレゼンに参加する人がそういう現状を知らないことは残念に思いました。やはり、そういう情報を「意識のある人」にもっと届くようにする必要がありますかと思いました。

ただ、今回のやり方、いろいろな人が話をすることはトランス・ディシプリナリティな考え方の芽にもなっているとも思うのです。バラついた発表者は多かったかもしれないけど、これも「超学際的」な手法としてはあるように個人的には思いました。

谷崎●どういう成果を求めらるかっていうことですよ。ね。「楽しかった」は、この場合は成果にならない。もちろん楽しくていいが、成果はなにか、ソリューションをつくることになるのか。地球研のPRであれば、エンターテインメントとしてやるということもある。

もう一つは規模。10,000人集めるイベントか、500人、1,000人のイベントかで、だいぶ変わってくるよね。だから、10の発表者だったら、もっと突っこんだ話ができたんじゃないかな。

村松●皇甫さんの話を聞くと、プレゼンターが「コ



ミュニティ・カフェをつくりたい」みたいな提案をしたら、その場で「そういうの、ありますよ」とちょっと降りてくるというか……。

龜石●「棚卸し」でしょう。

村松●そう、そういう接点みたいなのを厳密にすることも必要ですね。主催者はフラットに待つだけじゃなくて、その境界線みたいなのをしっかりさせる。「ここは現場ができていけど、地球研はもうすこし手伝えることがある」とか、「ここは地球研ができていなくて、現場に手伝ってほしい」みたいな微妙なものがあると思うんですよ。それを、今回みたいに上で待っているんじゃなくて、「共同でなにかをする」というスタンスになったほうがいいんじゃないかな。

大西●もっと積極的につなげる作業を、地球研がやる。

村松●そうです。事前準備をすることにもなるけどね。

この企画の社会的・地球的意義と 立ち位置を客観的に確認する

皇甫●大会に地球研はもっと食い込んでおくべきだったかなと。ちょっと地球研色が薄いと思いました。

半藤●こちらの準備の悪さはたしかにあったし、人手不足もあった。それとさっきの谷崎さんの指摘。応募者の発表要旨や強い「環境活動の意志」、それに「地球環境問題」を考慮しない主張を見たときに、どうしようかと思った。研究所で大会をやるべきなのかと。反省点ははずいぶんあった。

谷崎●発表内容のブラッシュアップのお手伝いもあらかじめ必要だったかもしれない。それぞれの発表——高校生なら高校生のよさがとうぜんあるわけですが、フレームをきちんと設定してあげると10代の視点として大人たちも耳を傾けることができる。

伊勢谷●たぶんいまは、「来年もやったらいいんじゃないか」という前提になっていると思うけど、この大会のかたちが社会的にどういうファンクションをもって

いるかっていう、その立ち位置をもうちょっと客観的につくってから企画しなおすことも必要かもしれない。けれども、準備で半年かかるとなればしんどくてやりたくなくなるかもしれない。だから、それがうまく回れる状態をどうつくるのかですよ。

ようは、いまの社会でこういう企画を実現することが必要だと考えたうえで、地球研がハブになって、みんなが集まって、そのうえでプロジェクトが実行されるのと、「なんとなくこうしていると、こういうことができそうだな」という気持ちでやるのとでは、ちょっと違う。やはり、より社会的に意味のある見え方になっているといい。「そこはこうやって、ここをやろう。そのときに、おれがこうがんばったら、なんか話になるかも」となったら、もしかしたらより高いレベルのものが現れる可能性もある。

半藤●くり返すことをプロジェクトにしてしまうのは楽ですね。ところが、国の予算で動きますから、事業としてやることになる。「事業」と「プロジェクト研究」とでは、予算の確保のしかたも、予算が確定するタイミングも違ってくるのが辛いですね。このしくみをうまく変えられたら、現状の問題も解消するし、理想的な姿も成立する。しかし、これはなかなかむずかしい。

仲津●外からお金を引っ張ってきたらどうですか。

半藤●われわれでは、なかなか力がおよばない……。

仲津●手伝いますよ。

半藤●それはうれしい。ぜひお願いします。(笑)

伊勢谷●そうしたら、強くなるよね。やる気も起こるじゃん。(笑)

仲津●パッケージングすることで、ステークホルダーが見える。お金をもっている人を利害関係者に巻き込めば、お金は揃えられる。

本気のソリューションが集まってくる場にしたい

谷崎●くり返しになるけど、半年かけるのはたいへんかもしれないけど、フレームの設定とかもできるわけだから……。それと、やっぱり地球研という研究グループの成果、課題設定と一般の人たちとのつながりはたしかに欠けている。そういう意味では、これをブランディングして、地球研の存在意義の一つにすることも可能ではないかな。そういうように、みんながマインドセットする。

ぼく自身のマインドセットとしては、やっぱり「本気のソリューションが集まってくるんだ」と思っていたところもあった。そこには至っていなかったの、このところだけはブレないようにしたいね。

伊勢谷●ユーストリーム (iPhone) に流れなかったし、次からは本気を出そう。(笑)

谷崎●ここでの意見をこのまま取り入れたら、かならずいいものになるじゃないですか。ほかの環境運動の人たちがやっていることとはぜんぜん違うんだから。やっぱり、「研究者グループの一員である」という誇りをもって、それぞれの研究をリスペクトして、ぼくたちのようにいろいろなタイプの人たちが集まれる環境があればね。アーティストとして関われる部分、コンサルタントとして関われる部分、そんな感じで集まれるといいね。

大西●ぜひ2回、3回と開催できればと思います。こんごともご協力をよろしくお願いします。どうもありがとうございました。(了)

おわりに

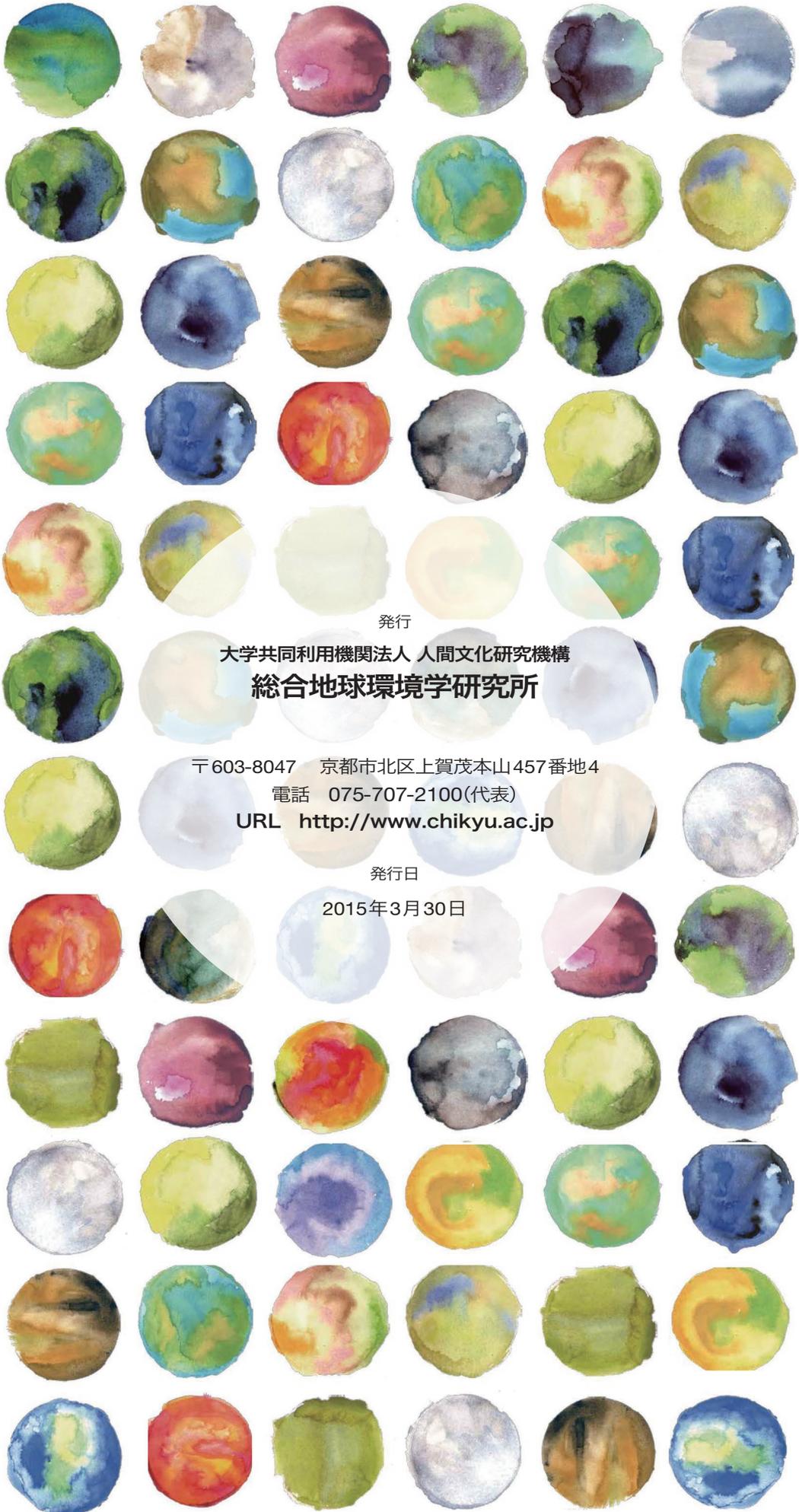
地球研は第12回地球研フォーラム「“共に創る”地球環境研究」で「地球環境問題のステークホルダーは地球に暮らすすべてわたしたちである」という命題を掲げた。多種多様なステークホルダーが会場に集うことを期待した。しかしながら、じっさいにフォーラムやワークショップを開催しても、ステークホルダーの多様性が担保できず、これは研究対象地域や課題設定に「研究者の興味・関心 (research interests)」が優先される研究プロジェクトにも共通することを認識した。新たな地球環境研究の国際的な枠組みである Future Earth にしても、国際科学会議(ICSU)が主導ということもあり、参加・協力を表明するステークホルダーも高学歴層に偏る。これは、研究者以外の「私益・公益 (private/public interests)」を考えずに地球環境問題解決にむけた「共有価値の創造」を無理やり行なっていることに起因するのではないか？

大会に先立ち、プレゼンテーション希望者を募ってみると、アマチュアからの応募が多く、研究者としては受け入れがたいアイデアもたくさんあった。それでも「科学的根拠よりも発表者の価値観」を優先したのは、研究成果・環境情報に対する「社会の受容体」を形成するうえで、この類のしかけが必要だと感じていたからである。大会翌日に評価員陣と行なった反省会では、さまざまな課題が浮き彫りになった。プレゼンテーションを行なった10人の発表者にはリバースプロジェクトや地球研と協力してなんらかのプロジェクト形成を始める人もいるであろう。基調講演者と評価員を務めた伊勢谷友介氏からは「地球研も社会のハブになれる」とコメントをいただき、あらためて超学際研究のあり方を考え始めている。超学際研究の「共創のプロセス」も、研究者がステークホルダーに押しつけたものになっていないか？ 再考の余地は充分に残っている。今日、大学では自治体・企業・NGO/NPOと連携をしてさまざまな事業を展開しており、さまざまなステークホルダーをつなぐ役割を担っている研究者の責任は重大である。

本報告書を一読し、本事業の成果が地球環境問題の解決に資するさまざまな活動につながってくることを想像していただければさいわいである。また、本事業に係わるすべての人びと、とくにMCとして大会を支えてくれた亀石太夏匡氏、さまざまな打ちあわせをとりまとめてくれた濱野幸雄氏、そして膨大な仕事量を滞りなく進めてくれた統括ディレクターおよび地球研スタッフに心より感謝する。

2015年3月30日

総合プロデューサー
半藤逸樹



発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4

電話 075-707-2100(代表)

URL <http://www.chikyu.ac.jp>

発行日

2015年3月30日